

一家総出のミュンヘン研究留学記

Research Unit Lung Repair and Regeneration
Helmholtz Zentrum München,
Comprehensive Pneumology Center

仲山 美沙子

(滋賀医科大学医学部病理学講座疾患制御病理学部門)

夫のミュンヘン留学に伴い、せっかくの機会なので私もドイツで研究がしたいと思い、同じミュンヘンで留学先を探しました。私は病理医ですが、前期臨床研修を修了後、基礎の病理学講座にてサルを用いたインフルエンザウイルスの病原性評価やワクチンの効果評価に携わってきたことから、感染後の肺上皮のダイナミックな変化に常々興味を持っておりました。そこで、肺に関するトランスレーショナルリサーチを行なっている Comprehensive Pneumology Center (CPC) を留学先として選びました。CPC は慢性肺疾患が世界の死亡原因の第二位であり死亡原因全ての約20%に慢性肺疾患が関与していることを受け、その予防、診断、治療の向上を目指し、2010年に創設された研究機関です。その母体組織は1960年に設立された年間予算約4千億円の研究機関ヘルムホルツセンターです。私の受け入れ決定には助成金が必須でしたので、助成金を賜りました上原記念生命科学財団に心より感謝申し上げます。

2017年9月末に夫、小学1年生の長男、6ヶ月の長女、また、当面の子守りを担当するため母の総勢5名でミュンヘンに到着しました。幸い長男はミュンヘン国際日本人学校にすぐに通学することが出来ましたが、保育園はどこも満所で、通園開始となったのは翌年の7月でした。それまでは母と義母に3ヶ月毎の交替で子守りを依頼し、私は研究に専念しました。現地の研究者の中にはオペアという住み込みの若者に保育や家事を依頼している人もおり、当時の私達はそのような制度の存在すら知りませんでした。共働き家庭には選択肢の一つとして挙がる方法だと思いました。

ミュンヘンの夏は乾燥しエアコンなしでも過ごせる程快適な一方、冬は-15℃程度まで下がり、大雪の中、そりで保育園に通園することもありました。家賃と物価がドイツの中では最も高い街として知られますが、治安は日本と同等に良いように感じられ、安心して暮らすことが出来ました。

私は学生時代ドイツ語選択だったもののドイツ語は記憶の彼方に有り、1年経った頃によやく現地人の会話の一部が聞き取れるようになりました。街中ではドイツ語が話せた方が

良い場面がありましたが、CPC ではドイツ国籍以外の研究者が約半分を占め、英語が公用語で助かりました。ヘルペスウイルスが専門の Prof. Dr. Adler、マトリックスジェノタイピングが専門の Dr. Staab-Weijnitz の二人の上司の元で、慢性呼吸器閉塞性疾患（COPD）患者由来の一次気管支上皮細胞を用いて COPD 急性増悪のメカニズムを解明するというテーマで研究を行いました。諸手続きには日本より時間がかかる印象でしたが、効率性を重視しながら、一度決めたことは徹底的かつ丁寧に遂行する姿勢からは学ぶことが多くありました。予想外の困難が多々ありましたが、二人の上司の暖かいサポートのおかげで何とか乗り切る事が出来たように思います。

私が出会ったドイツ人は家族と動物、自然をこよなく愛し、初めはとっつきにくく感じたこともありましたが、親しくなると懐の深さ、情の厚さを感じられました。家族との1年半の留学生活はかけがえのない経験となりました。この経験を活かし、国際社会に貢献できるような研究を行なって参りたいと思います。

(2019. 4. 30受領)